

■ 市場では世界的な経済活動「再開」への期待が一段と強まる！

前回更新分の本欄でも述べた通り、市場における当面の価格変動要因は「各国における経済活動再開の動き」と「感染拡大第2波の兆候の有無」、「治療薬やワクチンの開発状況」、そして「これらを受けた主要国の株価の動向」ということになる。

その実、今週は週初から米モデルナ社が開発を進める新型コロナウイルス「ワクチン」の話題が市場でしきりに取り沙汰されており、その試験結果が有望な初期兆候を示したと発表されたことで、18日のNYダウ平均は前営業日終値比+911ドルもの大幅上昇となった。

翌19日には医療関連ニュースサイトのSTATが同試験結果の信頼性に疑問を呈し、それによって市場のセンチメントも一旦は悪化したが、モデルナ社は（疑いを晴らすための）追加データを後日開示するとしているし、もとより市場は基本的にウイルス治療薬やワクチンの開発に係る全般的な取り組みに対しての期待感を日増しに膨らませ続けているものと見られる。

国際金融市場全体のムード好転は、日本株の上昇にも大いに貢献している。日経平均株価は昨日（20日）で4日続伸となり、本日も寄り付き段階から2万0600-700円処での推移となっている。今年1月高値から3月安値までの下げに対する「半値戻し（=2万0237円）」は既に達成しており、次に意識されるのは当然、2万1000円処ということになるだろう。ちなみに、今年1月高値からの下げに対する61.8%戻しは2万1152円であり、現在水準からは十分に狙えるレベルであると考えていいものと思われる。

少し振り返ると、今年3月初旬に石油輸出国機構（OPEC）加盟国と非加盟国との間で行われた減産協議が合意に至らなかったことで、米・日の株価は急落。結果、日経平均株価は3月6日と9日に「窓」を開けて下落する展開となったわけであるが、この「窓」の上限が2万0613円であり、いま足下では同水準をクリアに上抜けるか（「窓」は埋められるか）どうかが一つの焦点となっている。

ここ数日は、一目均衡表の日足「雲」をも上抜ける展開となってきたおり、ここをクリアに上抜ければ「三役好転」の強気シグナルが灯る。加えて、前記の「窓」をしっかりと埋めるとなれば一段の上値期待も大いに膨らむというものである。

こうした日本株の強い動きは、足下でドル/円がやや強気の展開となっていることとも無縁ではない。今週に入ってから、ドル/円は一時的にも108円台に乗せる場面を垣間見ており、現在108.30円処に位置する200日移動平均線が意識されやすい。

その背景には、今月22日に行われる臨時の日銀金融政策決定会合に対する思惑というものもないではないが、より大きいのは米連邦準備理事会（FRB）によるマイナス金利導入への市場の思惑が確実に後退していることであると思われる。そもそも、米国における経済活動の再開が順調に行けばマイナス金利導入の必要性は自ずと薄れる。むしろ、パウエル議長をはじめとする米連邦公開市場委員会（FOMC）メンバーらは、基本的にマイナス金利政策を支持していないし、4月に開催されたFOMCの議事録にも関連の記述は見当たらなかった。

まして、このところパウエル議長は一段の財政出動の必要性を陰に日向（ひなた）に訴え続けており、すでに金融政策は十分な役割を果たしていると言いたげである。仮に、一段の財政出動に踏み出すとなれば、それはトランプ米大統領にとって多分に選挙目当てとなるだろうし、同時にトランプ氏は「強いドル」の有効性をあらためて訴えることとなるだろう。

なお、足下で豪ドル/円が強含みの推移となっていることも見逃せない。5月7日更新分の本欄で指摘したとおり、豪ドル/円は70円処が重要な節目の一つとなっていたわけだが、今週に入って同水準をクリアに上抜け、同時に89日移動平均線をも上抜ける展開となった。世界的な経済再開の動き、ワクチン開発の話題、原油価格の持ち直しなどが背景にあることは言うに及ばず、豪ドル/円の上値余地が広がればドル/円の上値期待も高まりやすいということは再認識しておきたい。

（05月21日 11:00）